

- 私は将来小学校の教員になりたいと思っている。小学校では教科書などで地元の特産品を紹介している。しかし、教科書の知識では特産品を分かるだけで、実際にどのように作られているのかはわかりにくい。そのため、今回の活動を通してどのように作られているか、作っている方にはどのような苦労があるのかというようなことを理解して地元の特産品への理解を深めていく必要があると感じた。また実際にどのように作られているかを理解することによって、身近な食材へのありがたみをより感じる事が出来るのではないかなと思う。(教育心理)
- どの活動を振りかえっても普通に大学生を送るだけでは経験できないことばかりで、すべてがすごく貴重な時間でした。私は将来教師になりたいと考えています。実際に教壇に立った際には自分自身が体験したことをしっかりと生徒に伝え、食の大切さや日本の農業、ふるさとについてたくさん考えることのできる授業をしたいです。(教育心理)

(3) 自然・動物との共存、生ごみを出さない生活について

- 今回は院内町での動物への対策についても教えていただくことができた。院内町では、猪や鹿といった動物が山から下りてきて、道路や畑によく出没するそうだ。このような動物は、人に危害を加える恐れがあるほか、作物やその葉を食べてしまうことがあるそうだ。そのため院内町内には、椎茸のこま打ち作業を行った場所をはじめとする多くの場所に、動物の侵入を防ぐためのネットが張ってあった。植物の葉ができる位置自体を高くし、動物が葉まで届かないようにするといった工夫もしているそうだ。これらは、自然に囲まれ動物と共存している土地ならではの取り組みであり、学ぶことが多かった。今回の体験では、椎茸のこま打ちの仕方はもちろん、食べ物に感謝する気持ちや動物との共存などについて多くのことを学ぶことができた。(国語)
- 野菜を切った際に普段は生ごみとして捨ててしまうものも、飼育しているヤギがエサとして食べてくれるため、無駄がなく環境にも優しいと感じた。しかし、すべての家庭がそういった処理をしてくれる動物を飼えるわけではないので、今回の料理を通して食材をできるだけ無駄にしないような調理ができたらいいなと考えた。(生活環境)

(4) 事後レポートを書くことでの「学び」の再確認

- 世界農業遺産の地で農作業体験ができたことは、とても恵まれていることだし、私たちを歓迎し、指導してくださった現地の方なくしてはできない体験をさせてもらえた。そして事後レポートを書くことで、体験を客観的に振り返り、何を学んだのか、体験活動を通じて得たものは何かを考えることができた。この恵まれたプログラムに感謝したい。(環境教育)

⑥今後の課題

来年度より教育福祉科学部は教育学部と福祉健康科学部の2学部へ改組され、250名の定員が140名の定員となるので、教材養成課程における農作業体験学習の重要性をこれまでも増してアピールしていく必要がある。幸い、現地指導者、関係機関との連携態勢はきわめて良好である。

そこで上の課題のためにも、今年度より本格的に取り入れた「日本型食生活」に関する学びや調理体験について、今後はさらに充実させた内容にしていきたいと考える。

具体的には、まず毎年提出される学生レポートについて、「農作業・食育体験で何を学び、今後、どのような場面で活用したいか」「同じく、自己の食生活において、どのように生かしていきたいか」についての内容を記録として積み上げ、上級生が学んだ点を資料として配布することで、同じ教師を志す後輩にとって参考にさせたい。

次に各体験において、後々まで残る教材資料を作成して、往復2時間のバス移動の間も学習時間にあてることも有効である。